

## 外国人の人権尊重に関する実践事例

### 1. 基本情報

#### ○都道府県名及び市町村名

長野県松本市

#### ○学校名

松本市立山辺中学校

#### ○学校のURL

[https://www.city.matsumoto.nagano.jp/kodomo/gimukyoiku/shochu/junior\\_high\\_school/j\\_yamabe/index.html](https://www.city.matsumoto.nagano.jp/kodomo/gimukyoiku/shochu/junior_high_school/j_yamabe/index.html)

### 2. 学校紹介

#### ○学級数

【通常の学級】全学年3学級、【特別支援学級】2学級、【合計】11学級

#### ○児童生徒数

【全児童生徒数】263人（平成28年5月1日現在）  
（内訳：1年生87人、2年生95人、3年生81人）

#### ○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

（参考；昭和39～40年度 第7次同和教育研究指定校 ※以降指定なし）

#### ○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

##### 【学校の教育目標】

「笑顔と 潤いと 求める心の あふれる学校  
～求め合い 気づき 実践する 生徒と教師～」

##### 【人権教育に関する目標】

（育てたい生徒の姿）

- ・身の回りにある差別や偏見に気づき、差別を許さない人権感覚を磨く姿
- ・自分を大切にし、他人を尊重しながら良好な人間関係を築いていく姿

#### ○人権教育に係る取組一口メモ

「山辺ドリーム大学」（総合的な学習の時間）を通じて、体験、交流を基盤にして自分の生き方を考え、よりよい人間関係を築きながら共に課題を解決する意欲と態度を育成する。

#### ○人権教育にかかる取組の全体概要

- ・人権に関する正しい理解を図るために、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、生徒指導、進路指導、保健指導などの連携により人権教育を実施する。
- ・個の学びの充実（わかる授業）や居場所づくり（楽しい学校）により、自己理解や他者理解を進める。
- ・豊かな体験活動（山辺ドリーム大学、ぶどう作業、資源物回収、人権講演会など）を通し、様々な生き方に触れ、お互いを尊重できる姿勢を身に付ける。

### 3. 実践事例の内容

#### ◆ 地域の歴史から平和と外国人の人権について考える

##### ○取組のねらい、目的

「山辺ドリーム大学」は、学社連携した地域学習の取り組みとして、公民館等も加わって、山辺中学校の総合的な学習の時間で、複数講座にて展開されている。松本市山辺地区の「ひと・もの・こと」を教材とし、地域の歴史を通して生徒が自らの生き方について考える講座も設置されている。学ぶ対象には平和学習につながるものがあり、そこに戦争中に朝鮮半島から来た労働者との関わりがあるとする記録があるため、同時に外国人の人権についても、生徒が地域の学習を通して考えることのできる講座がある。

##### ○取組を始めたきっかけ

山辺地区には、太平洋戦争末期に、旧陸軍の計画により山腹に掘削された里山辺地下飛行機工場跡がある。いわゆる戦争遺跡として整備されておらず、地元でも年々存在を知らない人が多くなっている。一方、地域の歴史を研究している団体が、実地調査と関係者の聞き取り調査を行ってきたので、平成24年、山辺ドリーム大学の設置講座を考える中で、体験的に地域の歴史を学ぶことから自らの生き方を考えることにつながる対象と考えられた。また、聞き取り調査は当時の様子を知る地元の人だけでなく、工事に関わったとされる日本在住、現韓国在住の朝鮮半島出身の方にも行われており、戦時という過酷な環境の中、どのような体験をしたのか、どのような思いをしたのかを知り、現代を生きる子供たちが体験を通して、外国人の人権について深く考えることができることを期待した。

##### ○取組の内容

・長県教育委員会発行の人権教育リーフレット「いまここから自分から2」がモデルとして示した「里山辺地下工場跡」の学習展開も参考にして、本校の展開を考えた。



**地域ぐるみの実践(松本市)**  
—学校における取組より—

この「里山辺地下軍事工場跡」を教材化して、地域と学校と家庭が一体となって学習を進めていこう!

大規模な地下壕を掘削するのは、危険な重労働でした。現在のように重機はなく、削岩機でダイナマイトを仕込む穴を空け、爆破しては手作業で岩を削り、出た「すり」を運び出していました。この重労働に従事していたのが、主に当時植民地だった「朝鮮人」と言われています。

**人権教育の指導方法の工夫**

(第三次とりまとめ) 「体験的学習」に関して  
個々の学習者の体験をはじめとして、他の学習者との協同作業としての「話し合い」、「反省」、「现实生活と関連させた思考」の段階を経て、「自己の行動や態度への適用」へと進んでいくと考えられます。

参考: 「体験的な学習」に関する学習サイクル (指導等の在り方編 P.28)

```

        graph TD
            A[①第1段階: 「体験すること」] --> B[②第2段階: 「話し合うこと」]
            B --> C[③第3段階: 「反省すること」]
            C --> D[④第4段階: 「一般化すること」]
            D --> E[⑤第5段階: 「適用すること」]
            E --> A
            
```

**こんなふうに学習したい!**

- ① 地域教材(地域のひと・もの・こと)に出会い、ふれあう「**実体験**」を通して、はっとしたり、心をふるわせたりするような学習をしたい。
- ② 地域教材を通して感じたり考えたりしたことを身のまわりの人たちと気軽に「**対話**」できるようにしたい。また、地域・学校・家庭において、みんなの共通の話題にしていきたい。
- ③ 地域教材との交流をもとに、自分の見方や考え方、生き方やあり方について「**ふり返し**」たい。
- ④ 日常的に起きている様々な事柄と「**関係づけて**」考えていけるようにしたい。
- ⑤ 地域教材から学んだことを「**活かす**」ながら、いま・ここから・自分から行動したい。

**キーワード** ~感じ考え行動する学びへ~

①**実体験** ②**対話** ③**ふり返し** ④**関係づける** ⑤**活かす**

# 1 体験する



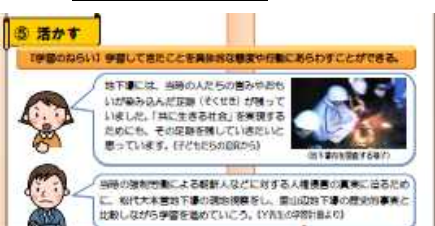
- (1) 地域講師（講座講師を担っていただく地域の専門家の「先生」）より、講座の概略について説明を受け、各自が調査したいことを決め出す。
- (2) 地域講師の案内で、実際に地下壕（工場）跡に入り、調査をする。

# 2 交流する



- (1) 各自が調査したことを、グループ内、グループ間で情報交換する。
- (2) 各自が調査課題を設定しなおす。
- (3) 地下壕内の掘り跡や、残されている文字や記号などから、作業に従事していた人について地域講師に示してもらおう。（地域で地下工場の歴史を研究している団体が、山辺地区の古老や、韓国在住の元作業員に聞き取り調査をした資料等）可能であれば、地域の古老との対話もする。
- (4) 各自が調査目的を更に明確にして、2回目の地下壕調査をする。

# 3 発信する



- (1) 調査テーマに沿った結果と考察をまとめ、発表内容、方法について考える。
- (2) 地域講師の助言を受けながら準備し、最終的なまとめは生徒だけで行う。
- (3) 山辺ドリーム大学総合発表会（文化祭にて）で全校生徒、保護者や地域の方に発表する。

## ○取組の主体や実施体制

- ・山辺ドリーム大学は総合的な学習の時間で実施され、里山辺地下工場跡の講座は「地下壕学科」との名称で実施した。
- ・内容と展開は地域講師と講座担当教員で協議して決めるが、進め方については地域講師に主となっていたが、教員は安全確保と個別支援を心がけた。
- ・地域講座生として、地域の方が生徒とともに講座に参加し、活動する。今年度は2名の方が生徒と活動した。

## ○取組の頻度

- ・総合的な学習の時間 年間18時間（2コマ 100分×9回）

## ○取組を実現するに当たって課題となったこと、及びそれに対して講じた工夫（以下4に記述）

#### 4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

##### ○取組を実施する際に生じた課題

朝鮮の方の地下壕掘削労働については、証言からは、作業労働者、管理者でいたなど様々な立場がある。聞き取り資料から当時の労働について生徒に考えさせる際には、資料提示に当たり、歴史的認識をふまえて、客観性をもってとらえられるようにする必要があった。

##### ○課題に対する解決方法

遺物や環境から、作業が過酷であったこと、戦時中ゆえ外出等行動の自由が制限されたことは推測できるので、地域講師と担当教員で協議し、生徒には現在とは異なる様々な労働の立場や状況がわかるように、資料提示を工夫した。

#### 5. 実践事例の実績、実施による効果

##### ○取組の実績

〈28年度の地下壕学科実施状況〉 講座受講生 生徒13名 地域受講生2名

第1回	地域講師による講座概要説明	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「里山辺地下壕跡」とはどのようなものか</li> <li>・何が目的だったのか</li> <li>・誰が働いたのか</li> </ul> ◇地域講師の説明とともに何を調べたいか考えた。
第2回	里山辺フィールドワーク	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地下壕のある里山辺地区を歩きながら、地形や当時の様子を学んだ</li> <li>・地下壕のある金華山山腹に残るトロッコール跡、半地下工場跡、宿舎跡と推定される場所、など</li> </ul> ◇ふだん歩いているところに関連する歴史があることに驚きを感じていた。
第3回	地下壕実地調査①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域講師3人の案内で、3グループに分かれ、地下工場跡に入った</li> <li>・巻尺やレーザーポインタを用いて、壕内の実測や、壁面のダイナマイト穴、トロッコール、壁面の文字や記号などを確認しながら、地下壕地図上に記入していった。</li> </ul> ◇壕内は全く光が入らないので、ライトを消すと完全な闇となる。講師の合図で一斉に光を消したとき、全員が息をのむ瞬間があった。
第4回	地下壕に入った感想や調べたことを発表し合う	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各自の地図に記録した情報を交換し、補い合う。</li> <li>・グループごと調査結果を発表、確認した。</li> </ul>

第5回	地下壕調査②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初めの予定にはなかったが、もっと調べてみたいとの生徒の要望もあり、2回目の調査を行う。</li> <li>・教室で交換した情報を、現地で教え合った。</li> </ul>
第6回	働いた人についての学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当時の周辺写真や証言記録、壕内に残された「天主」の文字、〇〇組の文字などから、多くの朝鮮半島出身の方が働いていたと考えられることを学んだ。</li> </ul>
第7回	調査結果のまとめと発表の準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域講師に疑問点を聞いたり、アドバイスをもらったりしながら、グループで発表にむけて考えをまとめた。</li> </ul>
第8回	生徒のみで発表準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パワーポイントの準備</li> <li>・発表に向けてのリハーサル</li> </ul>
第9回	総合発表会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全校生徒及び地域の方に調査結果を発表</li> </ul>

○取組が効果を上げた実際の事例

- (1)活動の導入で、調査を目的にし、概略の説明から各自が調査内容を考えるようにしたことで、目的意識がはっきりした。
- (2)地下壕調査では、実測を取り入れ、具体的な数字でも規模が実感できるようにした。また、詳しい説明の前に体験を仕組んだことで、壕の内部の寒さ、閉鎖空間の空気のおいなど、資料ではわからない日常からかけ離れた環境を肌で感じる事ができた。現在の地下壕は全く光が入らないため、人工の光がないと、完全な暗黒となる。講師の合図で、一斉に手持ちの懐中電灯を消したとき、誰も言葉を発することはなかった。無音の暗闇の中で、一人一人が心の中に湧き上がってくる恐怖を感じているようだった。
- (3)体験をした後で、資料で働いていた人について考えることができたので、命の危険があったこと、自由が奪われていたかもしれないこと、遠く異国で苦しい思いをしていたかもしれないこと、など、実感をもってとらえることができていた。
- (4)調査から考察を経て、生徒は発表資料をこのようにまとめた。(抜粋)

**地下壕調査学科**  
 テーマ  
 調査を通して、地下壕のことをよく学び、山辺の歴史をもっと知ろう。

**▶ここでクイズ**  
 里山辺地下壕には何千人の朝鮮人が連れてこられたでしょうか？

1 約1000人      2 約3000人      3 約7000人  
**▶正解は**  
 3の約7000人です


7000人というのは山辺中学校28校分です。  
 朝鮮の方は「安い費用でろくに食事にありつけず、つらかった」と話していました。

**ところで**  
 里山辺地下壕は何のために、どうやって建設されたのか？

里山辺地下壕は戦時中の戦闘機の製作工場になる予定でした。  



謎の穴

この穴は削岩機というもので掘ったもので、そこにダイナマイトをつめ爆破させたものです。



天主？

天主は、イエス・キリストのことです。当時、朝鮮では天主教として信仰されていました。



これからどうしていくか

- 戦争によって、自由を奪われた人達、このようなことが起きてしまったことを忘れてはいけない。
- 戦争を二度と繰り返してはいけない。など

(5) 発表の最後に、生徒は、

「この地下壕学科の学習で、地下壕の歴史や朝鮮の人のことを知って、自分たちにできることは何かを考えました。それは、戦争は起こしてはいけないということです。日本人も朝鮮人も、大切な自由を奪われてしまいます。私たちは、このことを知ることができたので、次は、伝えていくことが大切だと思いました。」と、発表することができた。

## 6. 実践事例についての評価

○取組についての評価、及びその評価する理由

- ・地下工場跡の現地調査という直接体験活動を通して、当時労働に携わった人の気持ちの一端でも想像することにより、証言の中にある言葉や思いが、生徒には実感を伴って自分事のように感じられたようである。それが、「伝えていくことの大切さ」という言葉になって表れている。外国人の人権について考えるとき、自らが感じる、思うことは国籍に関係なく、しかし、文化や立場が違えば、自分にはわからない思いを持つこともあることに気づくことが大切である。異年齢の人との交流も含めて、地域の「ひと・もの・こと」と主体的に関わることでできる「地下壕学科」は、外国人の人権について、「自分ごと」として見つめ、考え、つなげていくために、有効な学びではないかと考える。

○保護者や地域住民からの反応

- ・地域受講者が毎年2, 3名受講しており、比較的年齢の高い方が多いが、地下工場跡を知らない、この講座で初めて入った方も多し。地域の歴史を中学生と同じ立場で学ぶことにより、中学生の考え方も知りながら、改めて足元にある人権の課題について考えることができている。

○現在、実施に当たって課題と感じていること

- ・里山辺地下壕跡は未整備のため、近い将来見学調査ができなくなってしまう恐れがある。これからもこの学習を大切につなげていくためにも、映像資料など整備していく必要がある。